

【岩本論文へのコメント】

発達障害のある人の就労継続に向けた主体的な自己の発達

山 科 満

岩本氏は当事者として、氏が世に広く知られる契機となった著作である『発達障害の自分の育て方』以来一貫して、発達障害者にとって「自己」とは何であるかを論究してきた。本稿もその線上にあり、これまでの研究の結節点となりうる論文と言えるであろう。

氏の最終目標は、自己の発達を促進するための介入プログラムの開発であり、本論文はその基礎研究と位置づけられる。氏はあくまでも地道な記述に徹し、発達障害者の就労場面において重要な課題である二次障害の予防のために、自身の当事者としての経験を踏まえつつ、「主体的な自己」の発達を促すことが重要であると説く。その観点から、発達障害者の自己における主体性・自律性発達の要因を、自身の体験を振り返りつつ文献的に検討したものが本論文である。

しかし、本論文で岩本氏の学問は、発達障害者の就労支援の方法論に留まらず、そこを遙かに超えて精神病理学的な視座をも獲得しつつあるように思われる。精神病理学はヤスパース以来、統合失調症などにみられる精神の異常現象を精緻に記述し論考することを通し、人間の精神の本質に迫ろうとしてきた学問である。異常なものから正常なものを逆照射することで、初めて普遍的な真実が見いだされるはずという思想がその根底にある（滝川，2004）。脳科学的手法が一切無かった時代に徒手空拳で人間の精神の本質に迫ろうとしたのが精神病理学である。

氏の記述に必ずしもそのような野心的な含意があるわけではないが、引用されている50本近い文献は、氏が安易に今日の脳科学に依拠するのではなく、当事者すなわち一人称の記述や、専門職による関与し

ながらの観察・記述に基づく考察を展開していることを示している。この姿勢は、臨床精神病理学の方法に通じるものがある。

本論文を査読している最中、筆者は不思議な思いにとらわれていた。読みながら頭に浮かんでいたのは、発達障害の人のことではなく、筆者が東日本大震災以来東北の寒村で会い続けている2人の女性被災者のことであった。2人は、生まれ育った村で中学卒業以来ひたすら働き、50年近く守り続け「生きた証」そのものであった土地と家屋を震災で失ったのであった。彼女たちは、それぞれの言葉で、筆者に対し自身の内面を話し続けた。抽象的な精神世界とは無縁な村落共同体の中で生きること必死だった人が、「生きた証」の全てを失い、初めて自分という人間と向き合ったのであった。眠っていた叡智を総動員して言葉を紡ぎ、長い語りの末に主体的な自己の回復にたどり着く過程は、人としての尊厳に満ちたものであった（山科，2019）。

本論文を読み、筆者は彼女たちが語ったことの意味と聴き手の存在の重要性を一段深く理解し、語る営みが何のためであったのか、新たな気づきを得ることができた。このことは、本論文が「主体的な自己とは何か」という深い問いに本質的な答えを提示していることの証左であるように、筆者には思われる。

滝川一廣（2004）：「こころ」の本質とは何か—統合失調症、自閉症、不登校の不思議。ちくま新書，東京。

山科満（2019）：東日本大震災被災者の心理状況と回復過程—気質の異なる2例の対比を通して—。臨床精神病理，40，137-147。